

Title	懷徳
Author(s)	秋月, 胤繼
Citation	懷徳. 1930, 8, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88808
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

懷德 第八號

藝文

懷德

秋 月 胤 繼

本堂の名稱なる懷德の二字は論語里仁篇第十一章に見わたる「君子懷德 小人懷土、君子懷刑、小人懷惠、」といへる孔子の語中より取られたるものと思はる。因りて此懷德といふ文字に就き其意義を明にせんとす。

先づ前掲の孔子の語をいかに讀みいかに説明すべきかに就き一言すべし。孔子の此語は二様に讀まれ従つて二様に解説せらる。一つの讀方は君子^ハ懷^レ德^ヲ小人^ハ懷^レ土^ヲ。君子^ハ懷^レ刑^ヲ小人^ハ懷^レ惠^ヲ。と讀みて相對的に之を見んとし而して他の一は君子懷^ハ德^ヲ小人懷^レ土^ヲ。君子懷^ハ刑^ヲ小人懷^レ惠^ヲ。と讀みて因果的に之を見んとす。今其何れが正當なるかを考察するに論語の中には君子と小人とを對言せる所少なからざるも何れも其兩者を對等に見て因果的に見たる所なし。例へば君子喻於義、小人喻於利。(里仁篇) 君子和而不同、小人同而不和。(子路篇) 君子泰而不驕、小人驕而不泰。(同上) 君子上達、小人下達。(憲問篇) 君子求諸己、小人求諸人。(衛靈公篇)とあるは何れも然り。されば此章の語のみを因果的に見るはいかゝあるべき。矢張他の諸章と同様に對立的に見るを正當とす。斯く見ることにによりて孔子の此語も修養上尤も適切なる意義を有することゝなる。先賢か本堂に名くるに此名を以てせる所以の意も亦此に在りと思はる。然らばいかに此章を説明すべきか

といふに爲學修養に従事して居る君子は人間にとりて徳の極て大切なるを知り之を確かと我身に修得して失はざる様常に心を用ふる居るとなり。懷とは所謂念念忘れざる義にて常に之を心に存して忘れざる謂なり。之に反し學問修養に従事せざる小人は徳の尙ぶべきを知らざるよりそういふ深き考もなく只其居處の安を欲し只其身が安らかに其郷土に生活するを得は足れりとし其事のみを念念忘れずとなり。更に同じ君子といふ中にも段等ありて徳を懷ふ君子より一段下き地位に在る君子は刑を懷ふとなり。刑を懷ふとは其行が宜しきを失ひて國家の刑罰に觸るゝことなきかと常に心を用ふとなり。即ち法の畏るべきを知りて其身を守り法を犯さずとなり。此後の方の君子は前の君子の積極的に徳を懷ふて進んで德行を爲すに反し消極的に退き、非行を爲さぬ様心を用ふるものにて其間差等あるを免れず。又同じく小人といふ中にも土を懷ふ小人よりも一段下りたる小人は己の爲すべきことを爲さず自己の勤勞によりて正當なる報酬を得んとせず他の施し恵みに與からんことを念ふて忘れずとなり。此れ最も下れる人なり。要之徳を懷ひ刑を懷ふ君子はごこまでも徳を本として離れず反之土を懷ひ惠を懷ふ小人は欲を本として離れざるものなり。因りて孔子は兩種の人物を對比し其趨向の同じからざるを明にし人をして君子の心を以て心とし其徳を失はざらしめんとせられたるなり。

是より主題に入りて懷徳の徳とはいかなるものかに就き申述べし。徳には兩様の意義あり。天賦の徳と修爲の徳と是なり。斯く二様に分看するも徳に二種類あるにあらず。見様を異にするによりてかく分るゝにて其實は一なり。以下の説明によりて自ら分明なるべし。一體人は生れながらにして其心に尊き道理を具有す。之を徳といふ。大學の三綱領の一たる明明徳の明徳といへるは即ち此徳なり。書經の堯典に克明峻徳とある峻徳とは即ち此徳なり。又詩經に屢見わたる令徳といふも亦然り。然らば此の尊き道理を具へたる徳はいかにして人心に具はれるかを考察するに人は生れながらに之を得て居るものなれば之を天より賦與せられ

たるものと想定す。書の太甲篇に顧諟天之明命とあるは即ち此意を言明せるなり。詩の大雅蒸民篇に天生蒸民、有物有則、民之秉彝、好是懿德、とあるも亦然り。即ち性は天より命せられたる明德なりとの義なり。斯く人間の徳性は天より賦與せられたるものなりとの觀念を尤も端的に言明せるを子思とす。抑東洋の倫理學を代表せるものは儒教にして儒教の倫理學に其根基を置けるは子思なり。子思は其述作に係れる中庸の劈頭に天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教、といへり。是は子思か儒教倫理に於ける三綱領を明示せるものにて後世儒教倫理の甚大なる發展は主として子思の此立言に淵源せり。子思の此立言に含まれたる意義如何といふに廣大無邊なる全宇宙を主宰する者は天なり。吾々の生活する人間界も宇宙の一部なれば是亦天の主宰を受けざるべからず。天が宇宙に對して有する絶對無限の主宰力は元亨利貞の四徳によりて表現せらる。天は人間界を主宰するに當り其有する四徳に準じて人に仁義禮智の四徳を賦與す。天の人に賦與するよりして之を命といひ人の之を天より受くるよりして性といふ。人が天より受けたる性に率つて其性の本能を全うする所に人としての道生ず。是に於てか性は人道の由つて表現せらる所の本體にして尤も重要な意義を有することとなる。之が前に述べたる天賦の徳といふことの意味なり。即ち天賦の徳とは人が生れながらにして天より賦與せられたる徳といふ義なり。人は生れながらにして徳を天より賦與せられて居るといふ此思想は獨り儒教の思想のみならず西洋の倫理思想にもあることにて例へば英吉利の代表的倫理學者たるグリーンンの如きも人の心に具はれる尊い徳は天より授かりたるものなりと説いて居る位で此思想は洋の東西を通じての共有思想といふを得べく。然らば修爲の徳とは何ぞといふに人は生れながらにして此徳性を具備すると同時に此身あり。此身は氣質の生ずる所にして此に欲あり。欲は常に徳と人身中に對立して徳性の本能を障害し其作用を全うせしめざらんとす。尙書に所謂人心惟危、道心惟微、とあるは即是なり。人は聖ならざる限り必ず此

障害を蒙り其生れたる自然のまゝにては性に率ふ能はず。其爲す所道と相離るゝに至り自力にて道に由る能はず。是に於てか人間の行爲に適當なる節度を設け人道の在る所を示して之に由らしむるを要す。所謂先知者先覺者出で、人道を修整し天下萬人をして之に由らしむるは之が爲なり。之を教といふ。斯くて人は此教に由りて其徳を修め眞實に其徳を吾身に體得することゝなる。さりて其修得する徳は吾身外より之を吾身内に將來するにあらずして學問修養の功夫によりて吾身内に具有せる天賦の徳を明に自覺する謂なり。之を修爲の徳といふ。大學に所謂明明徳の明とは即是なり。大學に所謂格物致知誠意正心とは此修爲の法を示せるに外ならず。即ち先づ道理を究め明にして心の作用が其宜しきを得ることゝなるゆゑ意を誠にすることが出來意を誠にすることによりて心の本體其正しきを得て其結果其身修まることゝなる。大學の書の主なる目的は爲學修養の順序を示せるものにて學問に尤も關係あり。徳を修むることの必要につきては孔子すら徳之不修、學之不講、不善不能改、是吾憂也、といはれたり。斯く徳を修むることによりて修爲の徳は得られ之によりて天賦の徳を全うするを得るなり。譬へば明徳とは他の粗末なる礫石に包まれたる寶玉の如し。之を包める粗礫を削り取り之を磨き上げることによりて寶玉となると一般にて世の人の明徳は形氣の欲によりて蔽はれ居るゆゑ此欲を除き去りて初めて本來の明徳を明にし其光を發揮せしむるを得べし。

却説吾々の心にかゝる明徳の自ら備はれることに就きては孟子が諸方面より之を説示せり。先づ四端の説を唱へて之を明にせり。公孫丑上篇に

人皆有不忍人之心、所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心、非所以內交於孺子之父母也、非所以要譽於鄉黨朋友也、非惡其聲而然也、由是觀之、無惻隱之心非人也、無羞惡之心非人也、無辭讓之心非人也、無是非之心非人也、惻隱之心仁之端也、羞惡之心義之端也、辭讓之心禮之端也、是非之心智

之端也、人之有是四端也猶其有四體也、

とあり。此に端とあるは心の徳の發し現はれたる端緒といへる義にて此四端をたごつて其根本に溯つて見ると仁義禮智の四徳となる。是によりて仁義禮智の四徳が本來人心に具在せるを知るべしとなり。されば告子上篇にも

惻隱之心人皆有之、羞惡之心人皆有之、恭敬之心人皆有之、是非之心人皆有之、惻隱之心仁也、羞惡之心義也、恭敬之心禮也、是非之心智也、仁義禮智非由外鑿我也、我固有之也弗思耳矣、

といへり。次に良知良能説を唱へて之を明にせり。盡心上篇に

人之所不學而能者其良能也、所不慮而知者其良知也、孩提之童無不愛其親者、及其長也、無不知敬其兄也、親親仁也、敬長義也、無他達之天下也、

といへるは人間固有の良知良能説によりて天賦明德説を立證せしなり。又良心説を唱へて之を明にせり。告子上篇に

牛山之木嘗美矣、以其郊於大國也、斧斤伐之、可以爲美乎、是其日夜之所息、雨露之所潤、非無萌蘖之生焉、牛羊又從而牧之、是以若彼濯濯也、人見其濯濯也、以爲未嘗有材焉、此豈山之性也哉、雖存乎人者豈無仁義之心哉、其所以放其良心者亦猶斧斤之於木也、云云

といつて仁義之心即良心の自ら人に存在せることを牛山の木に譬へて證明せり。以上列擧せる所は孟子によりて與へられたる天賦徳性説の斷案とす。然るに人は情欲物欲等の爲に此天賦の徳性の本能を障害せられて其功用を全うする能はず。是に於てか學問修養によりて、其徳性の有ることを自覺する必要あり。されば孟子も其障害を爲すものを去りて之を養ふを必要とし苟得其養、無物不長、苟失其養、無物不消といつて天賦の

徳性を全うすると全うせざるとは一に其養を得ると得ざるとに在るを説き世人を警醒する所あり。斯くて爲學修養の功によりて其徳を修むれば明徳を明にする結果となるも然らざれば天賦の靈徳も其力を發揮する能はずして人間と生れながら禽獸と伍することゝならぬとも限らず。そこに何人にとりても爲學修養の必要を生ずるなり。

そこで本題に歸り懷徳といふこと即ち人は念念忘れず常に徳を我身に保有せんことを力めざるべからず。間斷なく心を此に用ふることにこりて徳を我身に確保することを得るなり。易にも君子終日乾乾夕惕若危无悔とあり。是は學者の切要なる功夫を示せるなり。此に序ながら一言すべきは學問修養に従事する者の多くが學問の目的は前記の如く實に徳を吾身に修めて之を實行する所に在ることなるに之を忘れて徒らに知識を求むるに偏倚して實行を輕んじ修養の本義を失ふこと是なり。是點は深く戒めざるべからず。中庸にも苟不至徳、至道不疑、故君子尊徳性、道問學、とあり。是は爲學の目的と功夫とを示し尊徳性は學問の目的である道問學は其功夫なりとして學者を諭されたるなり。然るに學者の多くは或は尊徳性に偏して道問學を忽にし或は道問學に偏して尊徳性を忽にし爲に學問を完成する能はず。斯くては眞に學びたるものといふべからず。學問は修徳の功夫によりて道に達するに在り。修徳の功夫によりて道に達するには常に徳を懷ひ徳を忘れざるやうにすること肝要なり。懷徳堂を創始されたる先賢が本堂に名くるに懷徳の名稱を以てせるは後學の爲に慮ること誠に深きものありといはざるべからず。